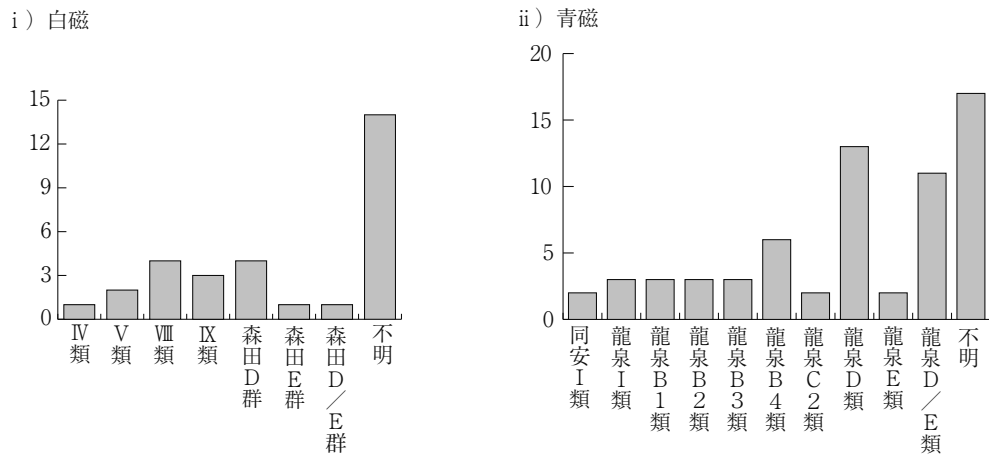
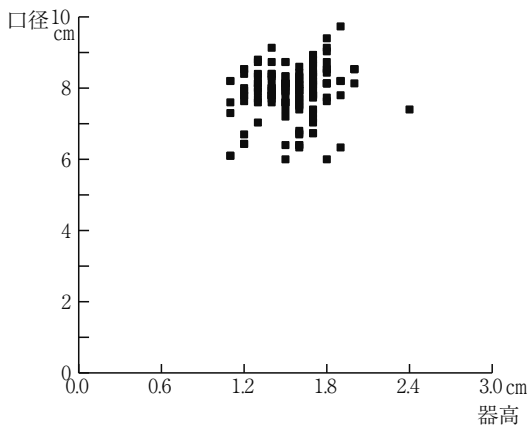


第 267 図 土器・陶磁器類数量組成



第 268 図 青磁・白磁碗・坏・皿分類別数量



第 269 図 土師質土器小皿の法量分布

(1) 土師質土器

土師質土器は1877点出土している。内訳は坏310点、小皿430点、鍋874点、羽釜22点、播鉢17点などで構成される。鍋が集計上多くなっているが、小破片をカウントしているため実際は坏、小皿が主体を占める。出土状況を見ると3区の北東側、掘立柱建物跡SB14周辺の柱穴群を中心する遺構群からまとまった量の坏、小皿が出土しており、残り具合も比較的良い。したがって、ここではそれらの坏、小皿の特徴を述べる。特徴は以下のとおりである。

- ① 坏、皿ともロクロ成形で、底部に板目状の圧痕を残すものが多い。手づくね成形のものはみられない。
  - ② 小皿の法量は、口径6.1～8.8cm(平均7.72cm)、底径4.2～6.6cm(平均5.1cm)、器高1.1～1.9cm(平均1.5cm)(第269図)。
  - ③ 坏の法量は、口径11.4～12.9cm(平均12.2cm)、底径5.3～7.4cm(平均6.5cm)、器高3.1～4.3cm(平均3.7cm)。
  - ④ 柱穴の柱抜取穴(痕跡)に埋納されたものが目立つ。
- ②、③に示した法量からみてこれらの坏、小皿は八峠編年Ⅲ期からⅣ期の範疇に収まると考えられ

る。貿易陶磁や国産陶器類との共伴関係をみると、井戸SE1上層では小皿とともに木村編年Ⅱ-2期の越前焼甕、古瀬戸中期Ⅲ期の折縁中皿、木戸分類Ⅲ-C類の滑石製石鍋、勝間田焼甕が出土している。また、屋敷墓の可能性のあるSK38では、小皿と伴に龍泉窯系青磁碗B1類、瓦質土器奈良火鉢の菅原分類浅鉢形火鉢B型が(菅原1989)、土坑SK17でも小皿がとともに木村編年Ⅱ-2期の越前焼甕が出土している<sup>2)</sup>。AMS年代測定では、SE1では前述した陶器類とともに上層から出土した炭化材が $601 \pm 19$ yrBP、SK38は下層から出土した炭化材が $623 \pm 21$ 、 $644 \pm 19$ yrBPを示し、土器の年代観とも矛盾しない結果が得られている。したがって、上述した坏・小皿の実年代については13世紀末から14世紀中頃が妥当と考えられる。

④については、SB8に近接する柱穴4では柱抜取穴の底面に、坏が3個体重なった状態で出土しており、建物解体時に丁重に埋納された様子が窺える。また、柱穴ではないが、土坑SK52やSK79では坏、小皿が一括廃棄された状態で出土している。こういった出土状況は土師質土器の坏・小皿の非日常的な使用方法を示していると考えられる。当時、いわゆるかわらけが灯明皿以外では儀式や饗宴などのハレの場に使用される器へと変質していったとみられ(小野1991)、本遺跡の在り方もそれを如実に表す一例と言えよう。

ところで、①で示したように本遺跡では、手づくね成形のものはみられず、とりわけ、京都系土師器皿が全く出土していない点が注目される。後述するように居館は15世紀から16世紀にかけても存続し、貿易陶磁や国産陶器類も各地から搬入されている。それにもかかわらず、京都系土師器皿がみられないことは意図的に受容しなかった可能性がある。現時点でその理由は明らかにしえないが、今後、当地域における京都系土師器皿の流通を考えるうえで興味深い事例となろう。

## (2) 国産陶器類

国産陶器類は529点出土している。内訳は瓦質土器216点、勝間田・亀山系須恵器108点、備前焼87点、常滑焼30点、瀬戸・美濃焼25点、越前焼14点、東播系須恵器4点、滑石製石鍋1点などで構成される。出土状況は井戸SE1で越前焼甕、勝間田焼甕、瀬戸美濃折縁皿が在地の土師質土器と共伴しているほかは、貿易陶磁と同じく遺構から出土した資料は少ない。

分類別にみると、まず、瓦質土器は羽釜32点、鍋51点、播鉢は9点で構成される。多くは在地産と考えられるが、屋敷墓の可能性のあるSK38では奈良火鉢が出土している。浅鉢で菊花文が施されており、14世紀代の資料と考えられる。

次に、備前焼は播鉢44点、壺7点、徳利1点で構成される。時期別にみると重根編年Ⅲ期以前は2点のみで、重根編年ⅣA期以降が大半を占め、備前焼の全国的な流通傾向と一致する。勝間田・亀山系須恵器は108点と出土点数が多いが、すべて甕の体部片で個体数にすれば僅かであり、時期も明確ではない。唯一、井戸SE1から口縁部破片が出土しており、共伴する越前焼甕や瀬戸美濃焼折縁皿、滑石製石鍋などから13世紀末から14世紀中頃にかけての資料と考えられる。

東播系須恵器は播鉢が4点のみと少ない。

越前焼は、播鉢10点、甕4点が出土している。時期は播鉢が木村分類Ⅱ-2期からⅢ-1期1点、Ⅲ期1点、Ⅲ2期新からⅣ1期1点、甕がⅡ-2期となり、概ね13世紀後半から14世紀にかけての中世前期の資料と考えられる。今のところ県内の中世前期における越前焼の様相は明らかではないが、備前焼が流通する以前にある程度搬入されていた可能性も十分に考える。

常滑焼は、鉢が1点、甕が29点出土している。鉢は中野編年6a型式の片口鉢Ⅱ類で、常滑の鉢が

表48 鳥取県内における滑石製石鍋出土遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	性格	出土位置	点数
1	秋里遺跡	鳥取市秋里	集落	溝(BⅡ区SD - 01)、遺構外	2
2	因幡国庁跡	鳥取市国府町中郷	官衙	遺構外	1
3	目久美遺跡	米子市目久美町	散布地	遺構外	1
4	菖蒲遺跡	鳥取市菖蒲	集落	遺構外	1
5	大井家ノ下モ遺跡	鳥取市佐治町大井	集落	遺構外	4
6	福呂遺跡	東伯郡三朝町山田	集落	遺構外	1
7	坂長熊谷遺跡	西伯郡伯耆町熊谷	散布地	遺構外	1
8	門前第2遺跡	西伯郡大山町門前	集落	遺構外	1
9	倉谷西中田遺跡	西伯郡大山町倉谷	居館	井戸(SE1)	1

西日本で流通することは極めて少ないことから、甕とともに偶発的に搬入された可能性が高い。

瀬戸・美濃焼は折縁中皿3点、卸皿1点、端反皿1点、平椀4点、碗6点、天目茶碗4点、香炉2点、燭台1点、壺2点などで構成される。特徴として皿や碗などの日常雑器に加え、天目茶碗や香炉、燭台といった威信材とみられる器種が出土している点が挙げられる。時期別にみると古瀬戸中期4点、古瀬戸後期10点、大窯Ⅰ・Ⅱ期3点、大窯Ⅲ・Ⅳ期1点で、古瀬戸製品が大半を占める。西伯耆は県内でも瀬戸・美濃焼の出土量が多く、比較的古い段階、古瀬戸前期Ⅲ期から搬入されていることが指摘されている(濱野2010)。本遺跡の瀬戸・美濃焼の出土量も比較的多いといえ、流通経路がある程度確立していた可能性が高い。

陶器の他に長崎県西彼杵半島産とみられる滑石製石鍋が井戸SE1から1点出土している。木戸分類Ⅲ-C類に該当する。県内において滑石製石鍋は9遺跡13点の出土例があり、秋里遺跡を除き、いずれも13世紀から14世紀の資料である(第48表)。この時期、石鍋は西日本を中心に爆発的に流通しており、本遺跡にもそうした状況下で搬入されたとみられる。

### (3) 貿易陶磁

貿易陶磁は128点出土している。内訳は青磁74点、白磁41点、朝鮮陶器5点、青白磁4点、高麗青磁1点、褐釉陶器1点、中国製天目2点で構成される。本遺跡における貿易陶磁の特徴として青磁が約6割と半数以上を占める点、青花がみられない点が挙げられる。貿易陶磁の出土状況は掘立柱建物SB2や井戸SE1、堀SD15・18など中世遺構から出土した資料は僅かである。

分類別にみると、まず、白磁はⅣ類1点、Ⅴ類2点、Ⅷ類4点、Ⅸ類2点、森田分類D群4点、E群5点で構成される。したがって、分類不明な小破片が多いものの、中世前期から後期にかけて出土量に差はない。次に、青磁は内外面無文で、端反椀の龍泉窯系碗D類が13点と最も多く、次いで龍泉窯系碗B4類が6点と多い。同安窯系碗Ⅰ類や龍泉窯系碗Ⅰ類などもみられるが、中世前期に比べ後期の資料がやや多い傾向が窺える。青磁、白磁以外では青白磁の合子、梅瓶、褐釉陶器の四耳壺などいわゆる威信財となりうる器種の出土は特筆される。

本遺跡の貿易陶磁の1㎡あたりの出土点数は0.008点/㎡となる。鳥取県内では在地領層の居館とみられる南原千軒遺跡において0.010～0.014点/㎡となり、西伯耆の中世集落である茶畑六反田・押平弘法堂遺跡の0.002点/㎡、居館の可能性のある門前上屋敷遺跡の0.009点/㎡と比較し、居館と一般集落とでは貿易陶磁の分布密度に明確な差が認められることが指摘されている(小口2008)。本遺跡の場

合も南原千軒遺跡や門前上屋敷遺跡に比較的近い数値を示しているといえ、同様の性格を反映していると考えられる。

越前焼については小野正敏氏、瀬戸・美濃焼については藤沢良祐氏、金子健一氏、青木修氏、河合君近氏、岩井修氏、常滑焼については中野晴久氏にご教示いただいた。また、山陰中世土器研究会の諸氏には陶磁器全般にわたって有益なご教示をいただいた。末筆ながら厚く御礼を申し上げる次第である。

註

- 1)各土器・陶磁器の点数は破片を1点ずつ累計した結果であり、実際の個体数を直接示しているわけではない。
- 2)SK80出土の越前焼甕はSE1出土の越前焼甕との接合資料である。

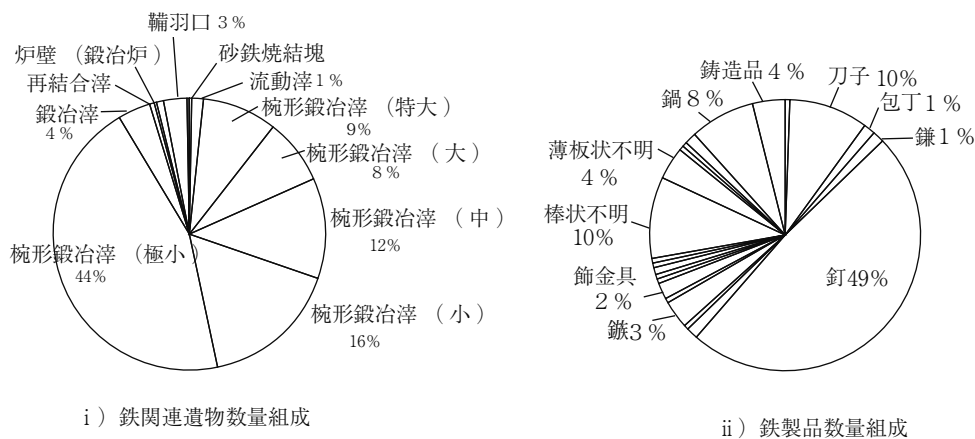
参考文献

愛知県史編纂委員会2007『愛知県史 別冊 窯業2』  
 濱野浩美2010「鳥取県出土の瀬戸・美濃陶器」『山陰地方における瀬戸・美濃陶器』山陰中世土器研究会  
 佐伯純也ほか2008「山陰地方における備前焼」『備前焼』山陰中世土器検討会  
 重根弘和2003「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念事業会  
 木村孝一郎2008「越前焼研究ノート」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会  
 木戸雅寿1993「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』日本中世土器研究会  
 八峠興1998「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会  
 菅原正明1989「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗資料館研究報告』第19集  
 横田健次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』  
 森田勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究2』日本貿易陶磁研究会  
 中野晴久2005「常滑・渥美」『中世窯業の様相－生産技術の展開と編年－』「中世窯業の様相－生産技術の展開と編年－」  
 実行委員会  
 上田秀夫1989「14から16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究2』日本貿易陶磁研究会  
 中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社  
 小口英一郎2008「第6節1 南原千軒遺跡出土土器の様相」『南原千軒遺跡Ⅲ・梅田東前谷中峯遺跡・梅田六ツ塚遺跡』  
 鳥取県埋蔵文化財センター  
 小野正敏1991「中世陶磁器研究の視点と方法－消費地遺跡からみた問題－」『考古学と中世史研究』名著出版

2 鉄器生産の様相

倉谷西中田遺跡では、中世の遺構や包含層から多くの鉄関連遺物が出土した。そこで、本項では当該期における鳥取県内の鉄関連遺跡と比較し、本遺跡における中世の鉄生産の様相を概観する。

(1) 操業内容と規模



第270図 鉄関連遺物数量組成

SI 2 弥生時代 鉄製品 (鍛造品)	SS 2 古代 橢形鍛冶滓 (小・含鉄) H(O)	SB 4 古代 橢形鍛冶滓 (小・含鉄) H(O)	SB 1 古代 橢形鍛冶滓 (小・含鉄) 銹化(△)	ピット群12P8 中世 鉄製品 (鍛造品)	ピット群12P21 中世 鉄製品 (鍛造品)	SB 14 中世 鉄製品 (鍛造品)	ピット群12P123 中世 鉄製品 (鍛造品)	SK 38 中世 炉壁 (鍛冶炉)	SK 14 中世 鉄製品 (鍛造品)	SK 76 中世 橢形鍛冶滓 (極小・含鉄) 銹化(△)	SD 18 中世 炉壁 (製煉炉?)
①	⑧	⑬	⑮	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗
②	橢形鍛冶滓 (極小・含鉄) H(O)	SK 21 古代 鍛冶滓 (含鉄) 銹化(△)	橢形鍛冶滓 (極小・含鉄) 銹化(△)	SB 14 中世 鉄製品 (鍛造品)	SB 14 中世 橢形鍛冶滓 (極小・含鉄) H(O)	ピット群12P39 中世 鉄製品 (鍛造品)	ピット群12P142 中世 鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	SK 16 中世 鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	橢形鍛冶滓 (極小・含鉄) 重層・粘土質附着物付 銹化(△)
③	⑨	⑭	⑯	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
④	鍛冶滓 (含鉄) 銹化(△)	SB 5 古代 橢形鍛冶滓 (極小・含鉄) 銹化(△)	SB 8 中世 橢形鍛冶滓 (大・含鉄) H(O)	SK 52 中世 鉄製品 (鍛造品)	SK 82 中世 鉄製品 (鍛造品)	ピット群12P41 中世 鉄製品 (鍛造品)	SE 1 中世 鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	SK 18 中世 炉壁 (鍛冶炉)	SD 15 中世 橢形鍛冶滓 (特大・含鉄) 銹化(△)	橢形鍛冶滓 (極小・含鉄) 銹化(△)
⑤	⑩	⑮	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
⑥	鉄製品 (鍛造品)	SB 7 古代 橢形鍛冶滓 (極小・含鉄) H(O)	橢形鍛冶滓 (小・含鉄) H(O)	ピット群12P13 中世 鉄製品 (鍛造品)	SK 79 中世 鉄製品 (鍛造品)	ピット群12P34 中世 鉄製品 (鍛造品)	SE 2 中世 鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	SK 40 中世 鉄製品 (鍛造品)	H(O)	H(O)
⑦	⑪	SB 4・5 古代 鉄製品 (鍛造品) 銹化(△)	鉄製品 (鍛造品)	SK 79 中世 鉄製品 (鍛造品)	SK 81 中世 鉄製品 (鍛造品)	SK 81 中世 鉄製品 (鍛造品)	SK 17 中世 鉄製品 (鍛造品)	SK 40 中世 鉄製品 (鍛造品)	SK 40 中世 鉄製品 (鍛造品)	橢形鍛冶滓 (小・含鉄) 銹化(△)	被熱石
	⑫		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	⑬		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	⑭		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	⑮		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	⑯		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	⑰		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	⑱		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	⑲		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	⑳		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	㉑		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	㉒		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	㉓		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	㉔		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	㉕		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	㉖		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	㉗		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	㉘		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	㉙		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
	分析		㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙

第271 図 倉谷西中田遺跡鉄関連遺物構成図(1)





本遺跡では鉄関連遺物が579点、総重量56.5kg出土している。内訳は椀形鍛冶滓、鍛冶滓、再結合滓、鞆羽口、炉壁、流動滓、砂鉄焼結塊などである(第270図)。椀形鍛冶滓が約9割を占め、製錬系の遺物のごく僅かである。したがって、本遺跡の鉄器生産は鍛冶を主体とした操業であったと考えられる。鉄製品は156点出土しており、内訳は釘、鋸、鎌、刀子、鍋、鍬、飾り金具、馬鋏、紡錘車、火打金などで、釘が76点と半数近くを占める。鍛冶具や未製品などは出土していない。

鳥取県内で中世の鉄関連遺物が出土した遺跡は管見に触れる限り16遺跡確認できる(表49)。そのうち鍛冶炉など鉄関連遺構が検出されている遺跡は円護寺坂ノ下遺跡、大河原遺跡、南原千軒遺跡、坂長第6遺跡の4遺跡のみである。このうち、居館における鉄器生産という点で共通する琴浦町南原千

表49 鳥取県の中世鍛冶関連遺物出土遺跡一覧

遺跡名(所在地)	鍛冶関連遺構	鍛冶関連遺物	出土鉄滓(点/g)	時期
1 倉谷西中田遺跡 (西伯郡大山町倉谷)		炉壁・砂鉄焼結塊・流動滓・椀型鍛冶滓・鍛冶滓・再結合滓・粘土質溶解物・鞆羽口・被熱石	554/55843.6	13～16世紀
2 円護寺坂ノ下遺跡 (鳥取市円護寺)	炉壁集積遺構・鋳型溜・鍛冶炉	椀型鍛冶滓・ガラス質滓・鍛造剥片・粒状滓・溶解炉炉壁・鞆羽口・鋳型	?/10728	13～14世紀
3 大河原製鉄遺跡 (倉吉市関金町山口)	製鉄炉・精錬炉・鍛冶炉	製錬滓・精錬滓・鍛冶滓・炉壁	?/?	16世紀
4 観音堂遺跡 (倉吉市関金町松河原)		鍛冶滓・鞆羽口・台石	?/?	12～13世紀
5 南原千軒遺跡 (東伯郡琴浦町光)	鍛冶炉・廃棄土坑・ピット	椀型鍛冶滓・鍛冶滓・精錬滓・再結合滓・鍛造剥片・粒状滓・鉄塊系遺物・炉壁・鞆羽口・石錘・鉄床石・被熱石	1514/249970.3	12～13世紀
6 橋本漆原山遺跡 (米子市橋本)		椀型鍛冶滓	1/172	16世紀前半
7 橋本徳道遺跡 (米子市橋本)		椀型鍛冶滓	9/1486.3	中世?
8 諏訪西山ノ後遺跡 (米子市諏訪)	鍛冶炉	鉄滓・鍛造剥片・粒状滓	?/?	13世紀
9 門前上屋敷遺跡 (西伯郡大山町門前)		椀型鍛冶滓・鍛冶滓・炉壁・鞆羽口・流動滓・	43/2175.1	11～12世紀 14～16世紀
10 門前鎮守山城跡 (西伯郡大山町門前)		椀型鍛冶滓・鍛冶滓・再結合滓・鍛造剥片・粒状滓・炉壁・鞆羽口・鍛冶具・鉄床石片・粘土質溶解物	31/1244	9～12世紀
11 茶畑六反田遺跡 (西伯郡大山町茶畑)		椀型鍛冶滓・鍛冶滓・鞆羽口	40/2061.8	中世
12 押平弘法堂遺跡 (西伯郡大山町押平)		椀型鍛冶滓・鍛冶滓・鉄滓・鞆羽口	22/808.8	鎌倉(12～13世紀中心)
13 坂長第6遺跡 (西伯郡伯耆町坂長)	鍛冶炉	椀型鍛冶滓・鍛冶滓・鍛造剥片・粒状滓・炉壁・鉄床石・被熱石	10/559	12～13世紀
14 天萬土井遺跡 (西伯郡南部町天万)		椀型鍛冶滓	2/?	中世以降
15 天王原遺跡 (西伯郡南部町朝金他)		鉄滓	3/545	鎌倉時代
16 霞牛ノ尾遺跡B地区 (日野郡日南町霞)		椀型鍛冶滓・鞆羽口	117/57900.5	16世紀後半?



第50表 倉谷西中田遺跡鉄関連遺物組成表(1)

遺物名	メタル度	SI2	SS2	SS3	SB4	SBI	SB5	SB7	SK4-5	SK21	SBB	SB14	P110	P95	P99	P59	P33	P36	P117	P55	SK32	SK79	SK81	SK82	その他	SE1	SE2	SK38				
		g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g
知摩(鉄鍔?)																																
砂鉄塊																																
流動鏝																																
楕形鍔治平	なし																															
酸化(△)																																
H(O)																																
(特大)																																
楕形鍔治平	なし																															
酸化(△)																																
H(O)																																
(大)																																
M(O)																																
楕形鍔治平	なし																															
酸化(△)																																
H(O)																																
(小)																																
M(O)																																
楕形鍔治平	なし																															
酸化(△)																																
H(O)																																
(極小)																																
M(O)																																
鍔治平																																
中層台層																																
鉄製品																																
袋状鍔																																
刀子																																
包丁																																
鎌																																
釘																																
籠																																
鋸具																																
鑊																																
掛金具																																
佛金具																																
射鏢車																																
火打金																																
馬鍔牙																																
靱																																
刀子状不明																																
6																																
鍔状不明																																
3.4																																
鍔状不明																																
9.1																																
へラ状不明																																
帯状不明																																
環状不明																																
鑊																																
鍔製品																																
知摩(鍔治平)																																
粘土質溶解物																																
縄瑛口																																
縄瑛石																																
計		232	7	228	7	5	15	2	67	3	1	92	1	67	3	1	9	2	1	3	6	1	2	7	1	3	3	1	1	1	1	1



軒遺跡と操業規模を比較すると、南原千軒遺跡では堀に囲まれた屋敷地内で12世紀頃の鍛冶工房が確認されている。金属学的分析の結果、鍛錬鍛冶だけでなく精錬鍛冶が行われたことが判明しており、鉄滓の総量が200kgを超えることから近隣地域や他集落に鉄器を供給するほどの大規模な鉄器生産が想定されている(小口2007)。それに比べ、本遺跡の出土量は多いとはいえ、操業規模は南原千軒遺跡よりも小さかった可能性が高い。もちろん、鍛冶工房自体が未調査であることを考慮する必要は十分にあるが、現時点は居館内の需要に応じた自家消費的な生産が第一義であったと考えておきたい。

## (2) 鍛冶工房の様相

本遺跡では鍛冶炉などの鍛冶関連遺構は確認されていない。ただし、鉄関連遺物の出土状況を見ると、SD15の南側、遺跡中央に入り組む埋没谷に堆積した包含層中に集中する傾向が窺える。鉄滓は鍛冶工房に隣接する谷や溝などに廃棄されることが多く、本遺跡の場合も埋没谷が排滓場としての役割を果たしていたと考えられる。したがって、鍛冶工房は埋没谷よりも南側の丘陵上、つまり方形区画の外側に存在していた可能性が高いといえる。

本遺跡は居館の外郭に鍛冶工房が付随すると考えられ、居館の内部に鍛冶工房が営まれる南原千軒遺跡とは鍛冶工房の配置に明確な違いが認められる。この配置の違いが生産規模や体制とどのように関わってくるのか、今後、他の居館や集落における鉄器生産を含めて考えるべき課題といえる。

## 参考文献

- 小口英一郎2007「南原千軒遺跡における鉄・鉄器生産の様相」『南原千軒遺跡2』鳥取県埋蔵文化財センター  
 小口英一郎他2008『南原千軒遺跡Ⅲ、梅田東前谷中峯遺跡、梅田六ツ塚遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター  
 坂本嘉和他2009『坂長第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団  
 谷口恭子・稲浜隆志2000『円護寺坂ノ下遺跡』財団法人鳥取市教育福祉振興会  
 日野琢郎1985『大河原製鉄遺跡発掘調査報告書』関金町教育委員会  
 日野琢郎・杉山裕之1993『関金町内遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』-大山池地区、油木地区、観音堂地区-関金町文化財調査報告書第19集 関金町教育委員会

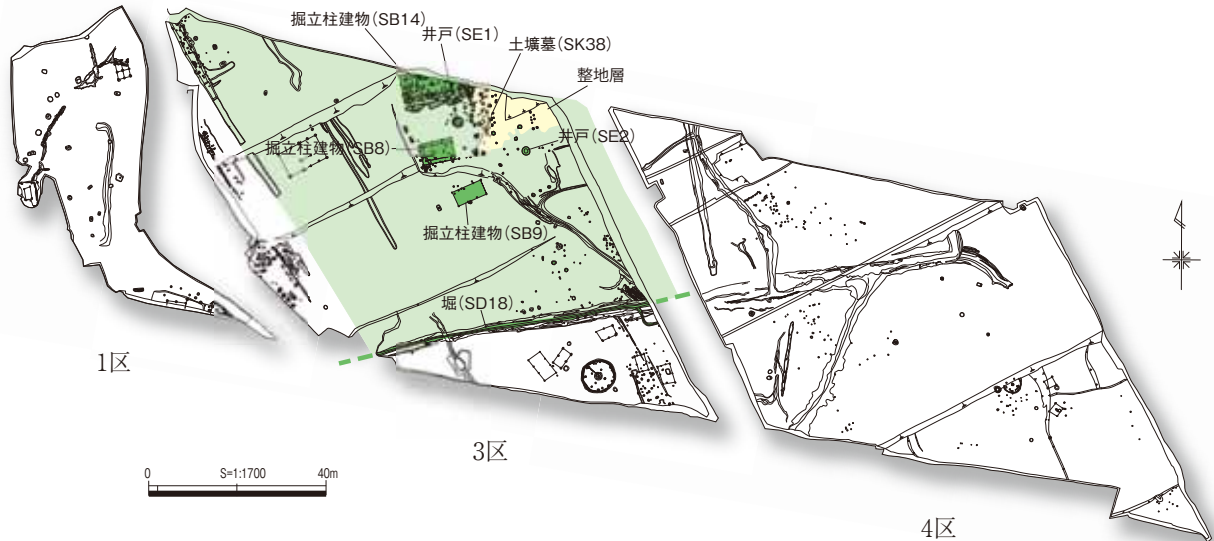
## 3 居館の変遷と構造

倉谷西中田遺跡では堀によって圍繞された中世の屋敷地を確認した。屋敷地内では掘立柱建物や井戸、墓などが確認され、遠隔地流通により搬入された各地の国産陶器類、貿易陶磁も出土していることから一般の集落とは異なる居館としての性格が想起される。そこで、ここでは居館としての倉谷西中田遺跡の性格について考えてみたい。

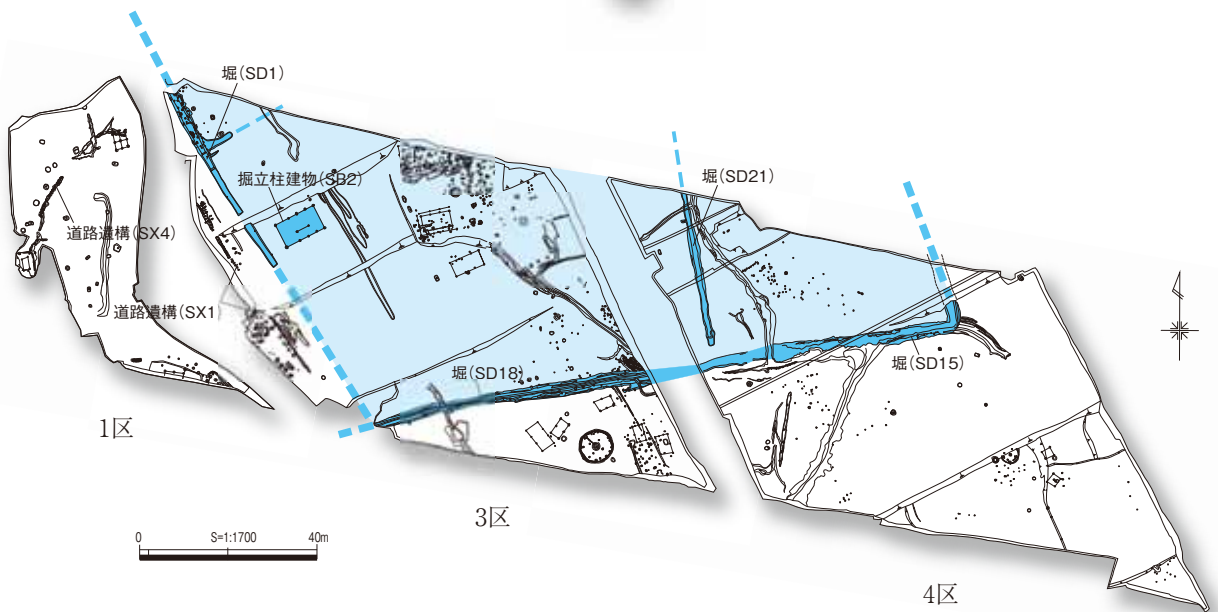
### (1) 遺構の変遷と時期

中世の遺構は、その特徴や重複関係、出土した土器・陶磁器類などからⅠ期とⅡ期の2時期に大別することができる(第274図)。Ⅰ期の遺構は堀1条(SD18)、掘立柱建物3棟(SB8・9・14)、井戸2基(SE1・2)、土壙墓1基(SK38)など、Ⅱ期の遺構は堀3条(SD1・15・18)、掘立柱建物1棟(SB2)、区画溝1条(SD21)などで構成される。

各時期の年代については、Ⅰ期は3区北東側の掘立柱建物を中心とする遺構群から出土した土師質土器坏、小皿やそれに共伴する陶器類から13世紀末から14世紀中頃にかけてと推定される。Ⅱ期は再掘削された堀SD18から古瀬戸後期Ⅱ期の平碗が出土していること、掘立柱建物SB2の柱穴から龍泉窯系青磁碗B4類が出土していることなどから概ね15世紀から16世紀前半にかけてと考えられる。



I期(13世紀末から14世紀前半)



II期(15世紀から16世紀前半)

第274図 中世遺構変遷図

## (2) 居館の内部構造

### I期(13世紀末から14世紀前半)

I期は、まず、屋敷地の南辺を区画する堀SD18が掘削される。堀の幅は1.5m前後、深さは最大1.3mほどで、断面はV字形を呈する。堀は東西に一直線に延び、丘陵を分断する。西端は丘陵斜面へ抜けていたとみられ、東端は遺跡中央に入り組む浅い埋没谷に当て収束させた可能性が高い。屋敷地の北側については調査区外で様相は不明だが、SD18に対応する堀が北辺に存在していた可能性は極めて高い。したがって、屋敷地は南北を人工の堀で区画し、東西については自然地形を有効利用するこ

とで独立した空間を形成していたと考えられる。その敷地規模は東西60～70m程度、南北60m以上と想定され、ほぼ半町四方といえる。敷地の形状は自然地形に制約を受け、やや歪ながら方形域を呈していたとみられる。

屋敷地内では敷地中央付近に掘立柱建物3棟(SB8、9、14)が造営される。いずれも東西棟で、方位はやや異なるものの3棟が並列する配置をとる。3棟とも梁行1間で、梁行の柱間寸法が桁行よりも広いという共通点を持つ。3棟のうち2棟(SB8、14)は三面廂の構造をとり、とりわけSB14は桁行が5間(13.5m)、平面積が90㎡を超える大型建物である。このSB14はSD8などの区画溝を巡らせていること、柱穴が密集して分布する範囲に位置し、複数回に及ぶ建替えが想定されることなどを勘案すると、居館内における中枢施設であった可能性が十分にある。

掘立柱建物周辺には井戸2基、土壙墓1基が近接して存在する。井戸はSE1が石組み、SE2は素掘りで、構造上の違いがみられる。土壙墓SK38は副葬品に乏しいが、屋敷墓であった可能性がある。なお、I期の掘立柱建物の柱穴内や周辺の溝や土坑内からは炭や焼土が多量に出土している。井戸SE1の上層に廃棄された越前焼などの陶器類も二次的な被熱が著しく、I期における施設群は火災によって廃絶した可能性が高い。

### II期(15世紀から16世紀前半)

II期になると、東西辺にも堀が掘削され、いわゆる方形区画が出現する。掘SD18は再掘削され、SD15へと続く全長130mほどの長大な堀へと変化する。堀の幅は約3mでI期よりも広くなり、断面は逆台形を呈する。この時期の堀はとくにSD18についてはその内側の一定範囲内に遺構がみられないこと、堀内に屋敷地側から断続的に地山のブロック土が崩落している堆積状況などからみて、土塁が併設されていた可能性が高い。また、堀SD1の北側では堀の肩部や底面に小穴が集中して穿かれており、板を渡し、それを杭で固定するような簡易な橋が架けられ出入口となっていた可能性がある。後述するようにSD1の外側に道路遺構SX1やSX4が存在することもそれを示唆するとみられる。敷地の規模は東西130m以上、南北90m以上と想定され、ほぼ一町四方とみて大過ないと思われる。

敷地内部は、堀によって内部空間が仕切られるようになる。SD21は屋敷地を東西に分ける堀と考えられる。また、堀SD1北側でも屋敷内にむかって東西溝が派生しており、遺存状況がよくないが、本来、内部を仕切る堀であった可能性が高い。

内部施設としては、掘立柱建物SB2しか確認されていない。SB2は桁行4間、梁行1間の側柱建物で、梁行1間というI期からの建物構造を踏襲する。1棟のみで性格は明らかにしえないが、平面積が54㎡と建物規模がやや大きい点、柱穴から龍泉窯系青磁碗や天目茶碗が出土している点は注目される。今回、屋敷地の面積からするとその半分程度しか調査しておらず、II期の主要な建物群は北側の未調査区に存在するとみられる。

### (3)居館外の様相

居館外をみると、まず、西側に道路が敷設されている。詳細な時期は特定できないが、堀SD1に並行することからII期の段階には機能していた可能性が高い。南北に延びる直線道路で、道路幅も4.5mほどと比較的広いことから北側に位置する山陰道とを結ぶ主要な幹線道路の一つであったと考えておきたい。また、西側の斜面ではSX4がみられ、波板状凹凸面から北宋銭が出土している。屋敷地内に向かって延びる位置関係から居館と平野部とを結ぶルートであったかもしれない。

南東側の外郭には前項で述べたように鍛冶工房が付随していた可能性が高い。鍛冶工房の操業開始

時期は明確ではないが、少なくともⅡ期の居館に伴うことは確実とみられる。現時点では鍛冶工房における鉄生産の規模は大規模とはいえ、居館内における施設の造営や維持に必要な鉄器生産が中心であったと考えられる。

#### (4)まとめ

以上をまとめると、倉谷西中田遺跡では鎌倉時代の13世紀末頃に人工の堀に加えて、丘陵上という自然地形を巧みに利用した居館が出現したと考えられる。その後、室町時代の14世紀中頃に屋敷地内の施設が火災により焼失し、堀も一度埋没する。火災の原因は不明だが、この時期は南北朝の動乱期にあたり、不穏な社会情勢を反映しているものなのかもしれない。そして、15世紀に入ると、堀を四方に巡らせるようになり、屋敷地は半町四方から一町四方へと拡充される。また、この頃までには屋敷地の外郭に鍛冶工房が配置され、道路なども整備されたとみられる。最終的に居館は16世紀前半には廃絶、もしくは別の場所へと移ったと考えられる。

周辺地域では近年の発掘調査により南原千軒遺跡、門前上屋敷遺跡で中世の屋敷地が確認されている。南原千軒遺跡では一辺80m以上の堀に囲まれた屋敷地内で主屋とみられる大型の掘立柱建物や屋敷墓、鍛冶工房などが検出されている(小口ほか2008)。門前上屋敷遺跡では内部構造は明らかではないが、堀や柵で囲まれた東西約30m、南北約40mの屋敷地が確認されている(牧本ほか2007)。これらの遺跡はいずれも平地に立地し、12世紀ごろには出現する、いわゆる方形居館と考えられる。それに対して、本遺跡は丘陵上に立地し、出現時期も13世紀末ごろとやや下る。広瀬和雄は領主居館をA～C型の三つに分類し(広瀬2006)、本遺跡のように丘陵や段丘崖、開析谷などの自然地形を活用した居館をB型居館に分類している。さらに、広瀬氏はこのB型居館を12世紀ごろに出現する平地居館のA型居館よりも後出的で、自然地形を取り込むことで防御性を高めた居館と位置付けている。本遺跡の場合、どの程度防御的機能を備えていたかはこの地域における他の城館などと比較したうえで慎重な判断を要するが、少なくとも15世紀ごろの屋敷地の拡充に伴い、丘陵や谷といった自然地形に加え、堀による方形区画を完備させた点に防御性を強化した側面を見いだすことも可能であろう。

今回の調査により文献資料にみられない中世の居館跡を確認した意義は大きく、今後は周辺遺跡と比較検討することで当該地域における中世社会の具体的な様相がさらに明らかになると期待される。

#### 参考文献

- 小口英一郎他2008『南原千軒遺跡Ⅲ・梅田東前谷中峯遺跡・梅田六ツ塚遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター
- 広瀬和雄2006「領主居館の成立と展開」『鎌倉時代の考古学』高志書院
- 牧本哲雄他2007『門前上屋敷遺跡Ⅱ・門前鎮守山城跡』鳥取県埋蔵文化財調査センター